

私にとっての日本～今までとこれから～

Japan to Me – Until Now and from Now Onwards

ハザリカ へマンタ (はざりか へまんだ)

九州大学大学院工学研究院 教授

1. なぜ日本？

私は来日して今年で 25 年という節目の年を迎えました。この機会に、自分の人生を少し振り返ってみたいと思います。1990 年にインド工科大学 (Indian Institute of Technology, Madras) の土木工学科を卒業し、1991 年 1 月に日本へ留学しました。当時アメリカ留学がブームだったインドでは、土木工学科の同級生の 30 人のうち 20 人がアメリカへ留学しました。私もアメリカの大学からオファーを貰い、半ば当然のようにアメリカへの留学に向けて準備をしていました。しかし私の中に迷いがありました。一つは地震地盤工学の最先端の研究が行われている日本の技術を学びたいという気持ち、もう一つは私の日本文化への強い憧れでした。私は悩んだ末、自分の学びたいこと、そして日本の文化に触れてみたいという自分の気持ちを信じ、日本語を全く理解できないまま名古屋大学の大学院へ入学する道を選んだのです。日本語が全くわからない私は研究室の学生とのコミュニケーションの面などで最初は苦労の連続でした。しかし、当時の指導教官松澤宏先生をはじめ名古屋大学の教職員、所属していた研究室の日本人学生、そして地元のボランティア団体の全面的なサポート、そして自分自身の日本文化への憧れと日本語を覚えたいという気持ちが心の支えとなり、様々な壁を乗り越えることができました。

学生時代は、愛知県留学生会の副会長を勤めたほか、地元のボランティア団体とボランティア活動を通じて日本人と様々な面で触れ合いながら留学生活を楽しく過ごすことができました。名古屋大学での 5 年間(修士 2 年、博士 3 年)の大学院生活は母国の大学生活より長く、来日して 25 年目を迎えた日本での生活もインドより長くなりました。研究者となった今、日本の地盤工学が高度な技術力を持っていることを実感し、アメリカへの留学の道より日本への留学を選んだ自分の直感が正しかったと自負しています。

2. 日本での産・官・学の経験

日本の大学院で学んだ地盤工学を実務を通してもっと深めたい一心で、私は博士課程修了後、当時の指導教官の松尾稔先生(元土木学会会長)、浅岡頭先生(元地盤工学会会長)の紹介で地盤改良の専門業者(日本基礎技術株式会社)に職を得ました(写真-1)。その時の技術的・社会的経験が今の私の素地を作りました。

しかし、子供のころからの「教育者になりたい」とい



写真 - 1 松尾稔先生の古希お祝いの日に

う夢もあり、その夢に向かって私は日本で優秀な若手の技術者を育てている高等専門学校の教官への道を選び、光栄なことに京都の舞鶴工業高等専門学校で教鞭を取ることになりました。インドで教育を受けた私にとって、日本の高等専門学校はとてもチャレンジングな教育現場であり改めて文化の違いを痛感しました。当時の校長の白石成人先生(京都大学名誉教授)をはじめ所属した建設システム工学科の先生方の大きな理解と支えがあり、教育活動に励むことができました。若い学生達とは教官と学生との間の壁を乗り越えるため学術面だけではなくいろいろな活動を通じて接し、苦労もありましたが、その経験は私にとって素晴らしい思い出となりました。

その後、大好きな地盤工学の研究をさらに深めるために大学の研究環境を求め、九州産業大学に転職いたしました。技術的な面では当時所属研究室の教授奥園誠之先生(元地盤工学会の副会長)から日本の建設業界の現場に関する知識をたくさん学ばせていただきました。教育の面で私にとって一番の課題だったのは、日本以外で生まれ育ち高等教育を受けた私がどのように日本の学生に刺激を与えることができるのかという事でした。

まだその課題を解決できていない時期でしたが、私に人生の大きなターニングポイントが訪れました。それは地震地盤工学を実務レベルで経験できる職業との出会いでした。もとより地震工学を学びたいという目標を持って日本にやってきた私はこの大きなチャンスを逃すことはできませんでした。目標を達成するため、私は港湾空港技術研究所の構造振動研究室へ転職しました。最先端の研究施設を有し、優秀な研究者・技術者が集まっているその職場では技術、行政、管理など様々な側面からた

くさんのことを学ばせていただきました。また、地震地盤工学の世界的なリーダーである石原研而先生（元国際地盤工学会会長）やその当時研究所の外部調査委員の方々からたくさんの支援・指導を受けながら勉強させていただいた充実した時期でした。

このように、産・官・学のすべての現場に勤めるという貴重な経験ができたことは有難く非常に幸せに思っています。港湾空港技術研究所の経験を経て再び教育現場へ戻った私は、建築の教育・研究の現場に携わることになりました。秋田県立大学の建築環境システム学科では、建築の学生に地盤工学に関心を持たせるのが自分の大きな役割と思い、研究の側面を土木から建築へ転換することになりました。

3. 国際化への取り組み

2010年に国内の13の大学を中心に文部科学省の教育の国際化のG30プログラム（Global Thirty）が始まり、私は2010年に再び九州へ戻り、九州大学が積極的に進めているグローバルコースの教員になりました。教育の面では、現職で海外でのプロモーション活動の一環として、年に数回海外を訪れ日本の大学のプレゼンスを示すことが今の私の大きな役目です。

研究・社会活動の面では、現在、国際地盤工学会（ISSMGE）のアジア地域の2つの技術委員会 ATC1（Geotechnical Mitigation and Adaptation to Climate Change-induced Geo-disasters in Asia-Pacific Region）と ATC3（Geotechnology for Natural Hazards）の幹事長を勤めさせていただいております。また、2006年の横須賀での国際ワークショップ、2007年のインドのグワーハーター市（アッサム州）での国際ワークショップ、2012年のインドのコチ市（ケララ州）での第1回日印ワークショップ、2014年の北九州市での日台の国際ワークショップ、2015年の福岡での第2回日印ワークショップ、2016年の台湾での日台の国際ワークショップを実行委員長、副実行委員長、幹事長などそれぞれの立場で運営し、学会の国際交流に微力ながら貢献して参りました（写真-2, 3, 4）。



写真-2 2011年香港でのアジア会議中石原研而先生（元国際地盤工学会会長）と東畑郁生先生（国際地盤工学会副会長）と懇親会の場で



写真-3 2016年日台合同ワークショップ（台湾）



写真-4 2011年香港でのアジア会議の懇親会

4. 今後の抱負と学会への期待

今後は JICA が推進しているプロジェクトに積極的に参加し、アジア地域の環境問題の解決および防災技術の発展など環境・防災教育に重点をおき、国際貢献をしていきたいと思っています。

グローバル化している今の時代、日本に拘らず広い範囲で国際的な活動を行うことが当然になってきました。高いレベルの地盤工学の研究開発が行われている日本の技術と文化を世界に広げ、日本がこの分野で更に国際的なリーダーシップを発揮できると私は信じ、今後も国際交流に貢献したいと思っています。日本のグローバル化活動において活躍できるようさらに勉学と研究に励みたいと思います。これらの経験に基づく社会的な活動はこれから国際レベルで競争していく研究者・技術者を育てるために非常に大事であると思っています。

大幅なリストラ対策を行い世界一の電化製品メーカーに復帰させたアメリカの GE (General Electric) の当時の会長の言葉「伝統は守るより崩すことで利益が上がる」を私は信じています。時代の流れに乗った学会の政策、多様性（男女共同ポリシー、国籍・年齢にとらわれない学会運営・活動の見直し、地方の若い研究者の学会離れの防止対策など）を取り入れた運営方針への大きな変化が訪れていると思っています。

最後になりましたが、学会全体の時代に即した改革を期待すると共に学会の益々のご発展をお祈りいたします。

（原稿受理 2016.12.22）